

# 住みよい地域づくりは住民の手で



## 雪塊を残さない除雪

特定非営利活動法人  
おいたまサロン

竹田 仁

「限界集落」という言葉が新聞に載っていた。高齢化率が五〇%を超えてしまった地区をそう呼ぶようだ。寒気を感じさせる表現である。「限界」なのだからそれを突破したら別の状況に入ってしまうことになる。この場合、集落が消滅に向かう状況を言いたいのだろうか。街中心部から離れた郡部の集落は、おしなべてこの傾向にあると思う。小さな町でも中心部付近に県営や町営の住宅団地が出来て若い家族が多く住んでいる。買い物・通学・通勤・等々、自然のありがたさを除けば街中のほうがうんと住みやすい。そういう需要に対して行政は住宅団地を作ってきたのであるが、その結果として街の中心部から離れた集落が持続できなくなることを想定していたのか。その対策が頭の中にあっただのか。

昨年、置賜地区のボランティア集会で「小学生が高齢者宅の雪道つけをしているところがある」と話したら、ある地区の女性が「私の地区には小学生も中学生も高校生もいない」と言つた。「一番若い人は？」と聞くと、「二

十七歳の役場職員だ」とのこと。「向かいの家の婆ちゃん、冬になるとひとり暮らしは無理だから春まで東京の方に住んでいる子供のところに行つてしまふ」と。住む人の減つてゆく現実がそこにある。「地区の会合でこの冬からは除雪機械を持つている人が持つていない家の通路の除雪をすることが決まった」とも言つていた。助け合わないと住むことが出来ないのだ。町への買い物は地区の人から車に乗せてもらつており、助け合いの体制は出来ているようだった。

都会では人口が増え、公共事業費も増えている。同じ日本の中で都会と田舎は異なる国の様相を呈している。田舎は都会の植民地。産業におけるお金の流れの中で利益の部分は東京に集まるしくみになっている。都会では知的労働で富を。田舎では肉体労働で生活を。高齢になり働けなくなつたら年金で暮らすしかないが頼みのそれも心もとない。まして雪国での暮らしは高齢者のみでは実際に無理。為政者がそういう社会的弱者のことを真

剣に考えているとは思えない。介護に従事する外国人労働者受け入れの検討に入ったことが新聞に載つていた。何か方向が違うような気がするのには私だけだろうか。

冬の生活で雪に関しての苦労の種は多い。その中でも道路除雪の際、路側に置かれる雪の塊りの始末は大変である。寒の厳しいときなどはツルハシで割らなければならぬ。高齢者にとつてはとても無理な作業である。

そのことを考えた米沢土建倶楽部（米沢市の建設業者組合）の提案により、「雪の塊りを残さない市道除雪」が二年前から始まった。高齢者宅など力仕事が無理な家の出入り口だけを対象にした除雪業者の奉仕活動である。米沢市の場合、除雪機械の稼働時間が支払いの対象ではなく、除雪道路の距離が支払いの算定基準となっている。そのためにとつとと掃こうがゆつくり手間をかけようが業者に払う除雪代金は同額。あちらこちら路側に雪を残さないように手間暇をかけることは除雪業者の無償ボランティアとなる。

# Value Sight 雪塊を残さない除雪



米沢市の寒中除排雪風景

計画の段階で二つの問題が生じた。ひとつは「どの家の前」を対象とするか。各家の「力仕事の能力」をどう査定するかということだ。市役所で判断できることでもない。一軒ずつ回ればどの家からも「うちの前はきれいにしてね」と頼み込まれるのは必至。そこで、町内会長さんにその査定をお願いをすることにした。判断基準は、誰がみても大変だなーだけ。除雪業者は指示された家の前にさしかかるとスピードを下げ、排土板の向きを変えきれいに仕上げを通過する。もう一つの問題は対象家屋の目印をどうするかだった。旗を立てれば済むことなのだが、防犯上問題がある。この家にはお年寄り・女性・子供しかい

ませんよ、と看板をぶら下げるようなものだ。協議の結果、除雪機械オペレーターにお願いをして降雪前に対象家屋を暗記してもらったことになった。業者さんには大変な仕事だが、お年寄りにとっては本当にありがたいことだと思う。

残る課題は屋根の雪下ろしと玄関から道路までの道つけ。これについては各市町村でそれぞれの支援を行っている。一回いくらという補助金を出している自治体が多い。この冬、NPO法人おいたまサロンは米沢市から「雪下ろし補助金交付」の作業を受託した。約八百件の雪下ろしにかかわった。お年寄りもいろいろ、下ろす人もいろいろ。あとで役所がNPOに外注してしまいたい訳を理解することになる。雪の降った日には二台の電話が鳴りっぱなし。つながった電話を短時間で終わすのは難しい。最後に九千円のお金（雪下ろし一回あたりの米沢市からの補助金）を個人の口座に振り込む段階でまたひと苦労。教えてもらった口座番号の間違ひが多く、該当する口座は存在しません」と金融機関窓口でトラブル、電話を掛け直して正確な番号を聞きなおしての繰り返しだった。

法句経に「おのれこそ おのれのよるべ他の誰に頼られようぞ よく調べられしおのれこそ まことおのれの寄る辺なり」とある。この箴言は個人にだけ当てはまるものではないと思う。地域こそ 住民の寄る辺 よく調和のとれた地域こそ 私たちの頼みの綱」と読み替えるべきではないか。なんでも行政にねだって済む時代は終わった。

地区の中で「力仕事ができる男たち」は、仕事の終えた夜に集まって「大変な家」の屋

根の雪を下ろす。屋根の雪が片付いたら、公民館でかあちゃんたちが作ったつまみで一杯やりながら地区のことを話し合う。地区のみんなの幸せを話し合う。子供たちは学校へ行く前に「大変な家」の前の道付けをする。心身ともに子供たちのためになる。

地域の中で組織活動を進める際に特に大事な点として、地区在住の公務員に企画の段階から参加してもらうことを提案したい。行政や学校と上手に折り合いをつけることにより、さまざまな情報を取り込むことが可能になり、きちんとした組織作りで寄与することが期待できる。なんといっても住民の幸せを考えることが彼らの仕事なのだから。

それが出来た地区には、利他の心がけと日常の感謝の気持ちひろがり、住民自らが地域課題を探してその解決を図っていく体制が出来上がるだろう。

今住んでいる場所が自分の舞台である。どういうステージを創るかは、行政のシナリオではなく住む人たち次第。何でも行政に任せられていると、「限界集落」が見えてこないか。

## 竹田 仁（たけだ・ひとみ）

特定非営利活動法人 おいたまサロン  
代表理事。

株式会社竹田組 代表取締役社長。

1949年 小国町生まれ。

本業の建設業は長男に任せ、現在は地域の福祉活動に奔走中。

連絡先：

〒992-0045 米沢市中央 1-3-10。

TEL 0238-26-7070・FAX 0238-26-7071

URL: <http://www3.omn.ne.jp/oitamas/>